

詩の本
I 詩の原理



詩の本

I 詩の原理

監修・西脇順三郎・金子光晴

筑摩書房

詩の本 第1巻 詩の原理

1967年10月20日 初版第1刷発行
1980年1月20日 新装版第7刷発行

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

郵便番号 101-91

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

振替 東京 6-4123番

[(分類)1390(製品)13301(出版社)4604]

印刷/理想社印刷 製本/永興舎
Printed in Japan

詩の本 第1巻 詩の原理

目次

I 詩を考える

詩とは何か

金子光晴 7

日本近代詩の流れ——詩論の展開

大岡 信 30

西洋近代詩の流れ——詩論の展開

清岡 卓行 92

II わたしの詩論

わが詩学序説

西脇順三郎 141

詩のはじまり・詩の運命

天沢退二郎 161

炎の花

宗 左近 181

知られざる Poésie をめぐって

高橋 睦郎 199

詩の言語と詩の空間

富岡多恵子 214

詩の生まれる予感

吉野 弘 229

詩のリズムの工夫

小野十三郎 250

I

詩を考える

金子晴
大岡信
清岡卓行

詩とは何か

金子光晴



詩とは何か、と大上段にかまえた質問に答えることは、僕のような人間にとってはまことに不得手なことです。

腕におぼえのある詩人ならば、わが詩に花を添えるに都合のよい原理を案出して、そのほうへ話をもってゆくのが常道でしょうし、理論の巧者ならば、いろいろ伝家の小むずかしいことをもちだして、ないものねだりをしたりして、一段とガクの程をならべ立ててみせるということもできます。しかし、浅学菲才で、なまけもので通った僕などには、あらたまって詩などとひらき直られても、日頃、気にもとめず、考えてもみたことのないことなので、さあ、と頭に手をのせてみても、なにとつ自分の考えなどはでてきません。いまさら、十日の菊というおもいです。

そこで、身近ながらくた本の山をひっくり返してみたり、グランラールスや、ブリタニカをかかえてきたりして、いかにもむかしから言いふるされてきて、もっとも千万なような「詩とは何か」

の返答にあてはまりそうなことをかきあつめ、そこから読者が氣に入るような説明をえらびとるといふ、狡い方法をおもいついたものです。他人の考えが一応出揃つてのうえならば、ことはずつと簡単になつて、うまくすると、我田引水な自分に言いたいことの緒がみつかり、この雲をつかむような問題が、おもいのほか、すらすらと、自分流に語れるのではないかと、そんな虫のいい期待もわいてくるのでした。

現代の詩を語るには、現代の詩人の考えていることをまとめて、そこから出発するのが順当でしょうが、そういう文献は手元にないし、それはまた、専門の先生方が、くわしく話されることでしょうから、手当り次第、大雑把に、古今東西の「詩とは何か」の話を、整理することもせず、散らかしっぱなしのままでお話することにしましょう。

詩は、志のおもむくところにて、こころのうちにあるときはそれを志と言ひ、言葉に発したとき、それを詩と名づける。情が、うちにうごいて言葉にあらわれるはじめは歎声となるが、それでもなお不満足な場合は、それをながく詩のかたちにして、のこすことになる。

これは、支那で孔子が三千ものふるくから伝えられた諸国の詩を、三百篇に厳選した最初のアンソロジー『詩経』のなかの「関雎」の序に書かれた詩の定義のようなもので、詩の発生を、要領よく説明したものです。孔子は固物で、世道人心によくないとおもつた詩をどんなにぶいて、棄ててしまったので、鄭衛のエロな詩などおもしろいものがたくさんあったでしょうが、それが残されなかったのは残念な次第です。詩の、素朴で、本質的な成り立ちは、情のリズミカルな言葉の表現

ということになりました。誰が、どんなおもいをうたってもいいわけですので、陳の後主の『玉樹後庭花』や、『玉台新詠』にあるようななまめかしい詩は、底恥かしいものとされ、一級詩人のうたう題材は、男々しいものでなければなりませんでした。

詩は、志のおもむくところという、その志というのが問題です。孔子をはじめ、春秋末からの諸子百家は、その説はまちまちでも、説くところは、王道、霸道、いづれにせよ、その説が大諸侯に用いられて、廟堂に立つて大臣宰相となって政治的手腕をふるうという目的では、一致しているといつていいとおもいます。志ということばは、野心のシノニムでもあるのです。老莊や、晋の清談の徒なども、一見、世外人にみえていますが、政治家や、營利の徒を輕蔑するポーズをとりながら、自己のきよらかさや、虚心恬淡を支えることの支えは、俗世間対のことで、支那人の実用的な性格のわずかな反動ということになるのでしょうか。

漢詩は、唐代を最盛時としています。そして、近世にいたるまで、詩は、政治家志望の青年の入試科目の重要なひとつになっていました。漢詩人の多くが官途人で、漢詩の内容が、儒教的理想に貫かれていて、少なくともそれが主流をなしていることが大きな特徴です。

しかし、多くのすぐれた詩人は、官に就いても不遇だったり、すねて世を韜晦したりした人に多かったのは、その不平や慷慨の感情が切実で、人の心につよくひびくからでしょう。左遷されて、遠隔の地から都をしのんだり、流謫の旅の途中で山川の悠久と人生の変転にころをうごかしたりしてつくった支那人の詩には、一種の悲壮美をとめない、支那から舶来したそういう詩は、日本に

も、志の詩として受け入れられました。幕末の勤王志士や、明治の政治家志望の書生たちのあいだでも、訓読された漢詩が朗吟ろうぎんされ、朗吟にあわせて舞う劍舞も流行しました。日本の自然は、大陸とはちがって女性的に優雅なので、漢詩の形容詞がぴったりしませんでした。漢字の平仄ひようそくなどの規則がむずかしいので、ほんとうに日本化されたよい漢詩というものはつくり出す人がありませんでした。でも、漢詩は官僚的な日本の民心にムードとしてふかくしみこみ、新体詩以後、近代の詩のなかに、形にまでも漢詩調がとり入れられたものが少なくなく、したがって、孤高の精神とか、澄んだ心境だとか、激情の吐露の場合とくに、いまだにその大だんびらを抜いて、日本の現代詩の領分にまで、われこそと横行して、自分たちでも気づかずにいるのを、よく見かけます。

紀貫之は「古今和歌集の序」を、

やまと歌は、人のところを種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世のなかにある人、事わざしげきものなれば、心におもふことを見るもの聞くものにつけて云ひ出せるなり。花に鳴くうぐひす、水にすむ蛙の声をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地あめつちをうごかし、目にみえぬ鬼神おにがみをも哀れとおもはせ、男、女のなかをも和らげ、猛きもののふの心をもなぐさむるは歌なり。

と言うことばで書きだしています。万葉のむかしからの日本の詩のなかでは、自然と人間への素朴な愛情がうたわれてきました。王朝の後宮を中心とした貴族生活の心の遊びとなつてからも、繊細せんさいなこころの綾あやや、うつりゆく季節への哀愁が、風雅にうたわれ、その後のながい歴史を通じて、日

本人の情操をやしなってきました。

平安仏教の無常観もよく問題にされますが、それも生活美化を本領としたスノープで、あの鎌倉・室町の陰沈とした宗教感情とはほど遠いものです。連歌、俳諧から、川柳、狂歌まで、だいぶ俗っぽくはなりますが、ともかく和歌のながれをひく日本の詩の本流で、今日なお、日本人のこまかい心情をあらわすのにふさわしい詩形として、ひろく行なわれています。

七音と五音を基礎にした日本語の調子は、和歌のほかには、ふるくは今様、小謡や、狂言小唄、弄齋ぶしや、諸国の俗謡、今日の流行歌まで、七五の組合せがいつも基本となつて、明治政府になつて小学校唱歌をつくるにしても、讃美歌を翻訳するにも、西欧にならつていよいよ日本の新しい詩が生まれることになり、その原形の「新体詩」がつくりはじめられるときにも、やはり、その七五の調子でしか手段がみつかりませんでした。それも、古来の文語体で、日常会話は、昂揚した感情をあらわすには、平俗すぎて使い道にならないものという考えが一般の常識で、今日のような口語体の詩を書くようになったのは、近々四五十年前からのことなのです。

今日でも、文語でなければ詩をつくらない現代詩人もいますし、五七調もいろいろ新しく活用されています。新体詩人は好んで、平安朝時代の雅語をつかっていますが、なかには、漢文調の得意な人たちもいました。また、感情が激すると、おもわず漢文調に乗るといふ傾向も、日本人の感情生活と密接にくっついてのことですから、詩本位だけに考えるわけにはゆきませんまい。

詩とは、胸にあまるおもいのことばによる感情的な表現と大まかに考えたうえで、その胸のなか

のおもいが、時と場所、時代にしたがってちがってくるのは当然です。花鳥風月をうたっていた和歌や、俳句が、現代の生活の悩みや、憤りをもうたっている今日、現代詩じしんも対象によって、多様な姿をみせるのは自然なことです。

思想の自由がともかくも認められている日本の現在で、万人にあてはまる真理がないように、「詩とは何か」もそれぞれに意見が喰いちがひ、ある人が惚れこんでいる作品が、別の人には三文のねうちもないとおもわれても、むしろ当然のことのようです。それに、他人になんと押しつけられても、体質的に嘔気がくるほど、肌にあわない好き、嫌いというものもあります。好きだった作品が、だんだん嫌いになることもあります。いくら千両役者でも、のべつ幕なしに見物していたら嫌気がさして来ましょう。

詩は、おもったことをできるだけなまなましくうつし取るなまもの、のところが身上なのですから、新しいということも、重要な要件のひとつです。「詩は、青春の芸術である」などとむかしから言われ、無雑作むざうさに使われてもいますが、じぶんの鑄型にとじこめられない前の清新な情感でふれた対象のほうが、より人の心をうつ作品となりやすいところから、詩を経験の芸術よりも、想像の芸術というふうにみている人が多かったようです。

「詩とは何か」とは、格別、説明をするまでもなく、古今東西、ほぼおしならして、わかりきったことのようにでありながら、せんさくのしかたでは、どうにでもとれて、百人百様、とうてい、とりまとめた正解がえられそうもなくなってきそうです。

そのむずかしさのはじまりは、新体詩草分けのはじめから、井上哲次郎などの翻訳による英米の詩に刺戟されて起ったもので、藤村が身につまされる恋愛への精液くさいあくがれの悶々をうたいたのを皮切りに、啄木の生活苦の歌や、花外の社会主義的な作品をよそにしては、日清、日露の戦争の国粹主義的な時代にさしかかったためか、詩人の作品の対象は、そのときの現実からは遠くても国民感情からはむしろ近かったかもしれない源平の戦いや、それにまつわる薄倅な美女へのあくがれの調べなどが、美文調の形容だくさんでとりあげられたものでした。

新体詩が太平記ばりの道ゆきぶりにはまり込んで、だんだんあがきがとれなくなっているとき、和歌の世界では、与謝野晶子らの奔放な情熱の解放の時代がはじまっていました。バイロン、ハイネがさかんに語られた時代です。このころの「詩とは何か」は、キリスト教会にあつまる青年男女のうじうじした恋愛ではなくて、わきたぎる血と肉のいのちをかけた情熱讃美を表現することでした。上田敏が翻訳した新しい西欧詩と、雅語のうまれかわったように新鮮でハイカラな駆使の効果は、その後の日本の詩のゆく道を決定したといってもいいでしょう。

フランスサンボリスムが口の端にのぼるようになったのも、その頃からです。桜桃梅李の一時にひらいた時代でした。蒲原有明を魁にして、北原白秋、三木露風をすぎ、川路柳虹、日夏耿之介、富田碎花、柳沢健、西条八十、堀口大学、福士幸次郎、千家元麿、白鳥省吾、佐藤惣之助まで、それぞれ欧米先進国の権威ある詩人を宗として、なかば祖述しながら、同時に自作を発表し、活潑なしごとをしている一方、室生犀星、萩原朔太郎、山村暮鳥などが、郷土的な抒情詩を発表し、それ

ら詩壇からすこしはなれたところで高村光太郎がコツコツしごとをしていたというのが、大正期の詩人の分布図だったと言うわけです。

この時代の「詩とは何か」は、各人それぞれの師伝があつて、芸術派と人生派の二つに大別するほかに、こまかい分類は無理のようです。一概に、師宗に近い傑作をつくつて、日本文化を世界の文化に近づけるという、明治以来の開国精神をそのままの氣風がのこつていたということは、詩の世界でも變りがなかったようです。人生詩は主としてあまりゆたかでない給料生活者、学生あがりのインテリたちに支持をもち、日常生活の不満や、苦しみを訴える作品が、第一次歐洲大戰後の反動的な不況時代と、關東地方の震災を契機にして、社會主義的な方向に意味づけられてゆくようになりました。

おなじ人生詩でも、白樺風な千家元麿や、武者小路実篤らの作品は、自然と自然のなかでの人間の素朴な生き方を讚美し、「詩とは何か」の問題は、「詩とは人生の感動の表現」ということになり、一種の神秘主義の領域に、もう一息で近づいてゆきそうなおもいさえたものでした。

それにくらべて、芸術派の人たちは、じぶんたちの生活からおよそ遠いところにある、西歐の雰圍氣にあくがれ、彼地の大作家の余風にふれることで、趣味、情操や、思考の末まで、貧乏くさい日本臭を脱して、どれだけあちらしくなれるかを、作品に賭けて自分に試そうとしていたと言つたら、文句の出るむきもありましようが、少なくともあの時代の人たちで、青春のある日、そうしたことを味わわなかった人があつたらめずらしいでしょう。したがって、詩は、うつくしくなければ